

日独のトレルチ研究の動向

野川 祈

はじめに

近現代ドイツのプロテスタンティズムの歴史を辿る時、神学者エルンスト・トレルチ(1865-1922)の名は欠かすことができない。その膨大な著作は、神学のみならず宗教社会学、歴史哲学の分野まで及び、彼は当時のドイツの文化プロテスタンティズム⁽¹⁾の中心的存在となった。

トレルチの生涯は、華やかなキャリアと多彩な人間関係に彩られたものである。1865年にアウクスブルク近郊の小さな村で、ルター派の信仰を持つ両親の下に生まれたトレルチは、1884年からエアランゲン大学で神学を学び始め、1889年からゲッティンゲン大学にて組織神学の教授としてのキャリアをスタートした。ここで彼は、リベラルな神学の一派である宗教史学派の中心人物として活躍する。また1894年から籍をおいたハイデルベルク大学では、社会学者のマックス・ウェーバー(1864-1920)、法学者のゲオルク・イェリネック(1851-1911)と共に、ハイデルベルク学派と呼ばれる、「デモクラシーとプロテスタンティズムの問題、さらには、プロテスタンティズムと近代世界の成立の関係の理解について、一つの共同戦線」⁽²⁾を形成した。1915年からトレルチは、ベルリン大学の哲学部の教授として招聘される。その前年にヨーロッパは第一次世界大戦に突入する。戦時中のトレルチはリベラル左派のドイツ民主党員として活動する、積極的な戦争賛成派であった。1919年のドイツ敗戦後の彼は、このときの自身の態度を悔いており、歴史哲学にコミットした新しいヨーロッパ和解に繋がる思想を模索していた⁽³⁾。しかしトレルチは急な病に倒れ、1922年にベルリンで生涯を終えた。急に絶たれた57年間の短い生涯ではあったが、残した功績、また人格的な評価の高さから言っても⁽⁴⁾大いに充実したものであったと言えよう⁽⁵⁾。

このように多彩な人生を歩んだトレルチの生涯と思想についての研究はこれまで数多くなされてきた。それは主に神学の分野においてであったが、ウェーバーと公私共に親密な交流があったことから、トレルチとウェーバーの思想の比較研究もこれまで多くなされてきた。また、トレルチの晩年の歴史哲学に注目した研究も近年見受けられる。本論文では、神学、マックス・ウェーバーとの比較研究、その他の分野という大まかな区分の下にこれまでの先行研究を整理し、その上でトレルチ思想に今後どのような接触の仕方が考えられるかを簡単に述べたい。

1. 神学

ここで紹介する、神学の分野におけるトレルチ研究は、ドイツと日本に限定する。ドイツはトレルチが生涯を過ごした地として、最もトレルチ研究が盛んな国である。また日本では、ドイツの神学の影響を強く受けた神学者達を中心に、トレルチ研究が進められている。本来であれば、リチャード・ニーバー(1894-1962)やパウル・ティリッヒ(1886-1965)といったトレルチの影響の強い

神学者が活躍し、その影響が未だ色濃く残るアメリカも入れるべきであるが、文字数の関係上ここでは割愛する。ただし、トレルチ研究史において欠かせない著作や、研究者については随所で述べたい。

1-1. ドイツ

プロテスタント神学界において、戦後しばらくトレルチの評価は低かった。それは、現代神学を代表するスイス人神学者カール・バルト（1886-1968）を始めとする弁証法神学者による、ドイツの極端なナショナリズムを止めることをしなかった近代神学への厳しい批判が神学界を席卷したからであると考えられる。トレルチとバルトの複雑な関係について考察しているのが、ドイツの研究者ヴィルフリート・グロール『トレルチとバルト—対立における連続—』（西谷幸介訳、教文館、1991年）である。ここではまず、バルトがトレルチを意識したきっかけとして 1911 年のトレルチの講演「信仰についてのイエスの歴史性の意義」が挙げられている。このとき既にバルトは、旧時代の神学の終焉と新たな神学を構築する切迫した必要性を感じていたと言うのである。またグロールは、バルトの代表的な著作『ローマ書講解』と講演「社会のなかのキリスト者」におけるトレルチへの言及を引用・解説し、バルトがいかにトレルチに代表される近代ドイツ・プロテスタンティズムに反抗したかを分析する。しかしグロールは同時に、バルトのトレルチ引用が原文での本来の用途からずれていることも指摘している。そのことによって彼は、2 人のいずれかの正当性を選択することを読者に迫るのではなく、それぞれの時代に必要とされた 2 人の神学の社会的な意義を読み解こうと試みているかのようである。

バルトが当時、このように厳しくトレルチを批判したのは、この 2 人の信仰上の立場が根本的に異なっていたことが理由の 1 つとして挙げられるであろう。トレルチが大学の教師として、より学問的な神学に立ったのに対し、バルトは実際に伝道に従事し、説教を聞きに集う労働者の側に立つ牧師として、より実践的な神学に立ったという大きな違いがあった⁽⁶⁾。バルトにとってトレルチの神学は、この時点で、いわば生温いものに見えたのである。また所属する学派としても、バルトは「ヘルマンの弟子として、また靈感を受けたマールブルク学派の人物として」⁽⁷⁾活動したのであり、歴史と聖書学に依る宗教史学派に所属するトレルチとは対立する立場にあった。更に、スイス人であるがドイツに長く留学して神学を学び、多くの恩師と友人をドイツに持ったバルトは、第一次世界大戦においてドイツの神学者らがとった戦争賛美の立場に大きな衝撃を受け、彼らとの断絶を宣言した⁽⁸⁾。神学への大きな失望はしかし、神のみに立ち返る素直な信仰を彼の中に呼び起こし、この時の経験がやがて、戦争で心砕けたキリスト者全ての希望となりバルトの名を一躍有名にした『ローマ書講解』⁽⁹⁾の執筆に繋がるのである。そしてこの書によってバルトは、誰より情熱的で、神の僕であろうとするキリスト者として、戦後のヨーロッパ神学界を代表する人物となった。

このようなバルト主導のヨーロッパ神学界がトレルチ批判に傾いた一方で、本国ドイツでは、H. G. ドレッシャー、ボーデンシュタインらが、トレルチ研究書を発表し、おおむね彼の思想を評価し継承する姿勢を示した。

ドレッシャーは、1950 年代から既にトレルチについての学位論文を提出していた⁽¹⁰⁾。また近年では、『エルンスト・トレルチ 生涯と仕事』（Hans-Georg Drescher, *Ernst Troeltsch, Leben und Werk*, 1991）という最新のトレルチの伝記を出版したが、これはその詳細さと正確さにおいて評価

が高い伝記である。

ボーデンシュタインは、1959年に発表した書物『歴史主義の遺物 エルンスト・トレルチの発展の道筋』(Walter Bodenstein, *Neige des Historismus. Ernst Troeltschs Entwicklungsgang*)⁽¹¹⁾において、トレルチの重要な著作を年代順に解説することで、彼の思想を考察した。戦後のトレルチ研究書として貴重な一冊であるが、この時点では、彼のトレルチに対する評価は、「挫折した神学者」⁽¹²⁾であり、その思索の結末を「悲劇的」⁽¹³⁾であると結論付けている。これはトレルチの急死による思想の未完成、また戦後の評価の低さを示すと考えられる。

ここで、アメリカの状況についても簡単に触れておきたい。戦後のアメリカでは、リチャードとラインホルトのニーバー兄弟、第二次世界大戦中にナチスの手を逃れるため、ドイツから拠点を移して活動した神学者であるパウル・ティリッヒが、トレルチ神学に影響を受けたことを明言し、彼の神学を受け継ぐ姿勢を示している。彼らはいずれも戦後のアメリカを代表する神学者であり、その彼らに評価されたトレルチもまた、後世の研究者達の興味の対象となった。また後述するが、近年のアメリカでは、歴史哲学者としてのトレルチに焦点をあてた新たな研究動向が生まれてきている。

まず、リチャード・ニーバーは、代表的な著作『キリストと文化』(赤城泰訳、日本基督教団出版局、1967年)の序文において、この著書がトレルチの代表作『キリスト教会の社会的教説』を補足、修正するためのものであると明言する。そして彼から、「キリスト教史上の多くの人々や運動の多様性と個性に敬意をはらうことを、またその豊かな多様性をあらかじめ作りあげた概念的な鋳型に無理に流し込むことをきらうことを、しかもミュトスの中に理性を、実存の中に本質を追求すること」⁽¹⁴⁾を学んだのだと述べる。

パウル・ティリッヒとトレルチの関わりは、ティリッヒが第一次世界大戦後にベルリン大学の講師となった頃に活発であった。従軍牧師として戦地に赴いたティリッヒはその悲惨さに衝撃を受け、キリスト教が積極的に関与したよりよい社会を作り上げる手段として、「キリスト教的社会主義」という理論を形成しようとした。その際、彼が大いに参考にしていたのが、トレルチの大著『キリスト教会と諸集団における社会教説』だったのである。しかし、ナチスがドイツで主権を握ると、ティリッヒはナチスに反抗し、その言説も自然と攻撃的で実際的なものとなった。ナチスの手を逃れ、ティリッヒは1922年にアメリカへ亡命する。以降もティリッヒはキリスト教的社会主義の道を模索していくが、ドイツに居た頃に比べると、トレルチへの言及は少なくなった。むしろ、ドイツに居た頃の「前期ティリッヒ思想」に、トレルチの影響は根強かったと言うべきであろう⁽¹⁵⁾。

近年のドイツにおいて、再びトレルチは積極的に研究されるようになった。そのきっかけとなったのは、1965年にトレルチ生誕100年という節目の年を迎えたこと、そして1968年にバルトが逝去し、現代神学界の潮の流れが変わり始めたことであると考えられる。バルトの存在は、それほど偉大であり、絶大な影響力を有していたのである。更に、1981年にドイツの自由主義神学者ヴィルヘルム・フォン・グラーフがホルンスト・レンツと協力して「エルンスト・トレルチ学会(Ernst-Troeltsch-Gesellschaft)」を創立した。トレルチ学会からは、『エルンスト・トレルチ学会会報』(Mitteilungen der Ernst-Troeltsch-Gesellschaft)という雑誌が発行されている。以来この学会が、ドイツにおけるトレルチ研究を現在に至るまで牽引してきている。またトレルチ全集が彼の死の直後に一度発刊されたが、グラーフを中心に改訂作業がなされ、『エルンスト・トレルチ全集

批判版』(Ernst Troeltsch Kritische Gesamtausgabe)⁽¹⁶⁾が 2015 年までに全 12 巻出版された。

現在日本で最も広く読むことの出来るドイツのトレルチ研究者は、グラーフであろう。彼は聖学院大学や東京神学大学の招きを受けて幾度か来日し、その時の講義やシンポジウムの記録が出版されているからである。グラーフは自らを自由主義神学者であり、教会に所属しないキリスト者であると宣言している⁽¹⁷⁾。自由主義神学者とは、近代神学の創始者とされるシュライエルマッハーに倣う立場である。またグラーフの特徴は、時代状況ありきで神学を考察するところにあると考えられる。例えば、『ハルナックとトレルチ』(近藤正臣, 深井智朗訳, 聖学院大学出版会, 2007 年)では、「帝政ドイツにおける宗教」という章から話を始めている。またグラーフはトレルチと他の研究者の相互影響にも注目しており、『トレルチと文化プロテスタンティズム』(深井智朗, 安酸敏眞編訳, 聖学院大学出版会, 2001 年)には、「マックス・ウェーバーとその時代のプロテスタント神学」と題した論文が収録されている。これはトレルチ学会全体の傾向であると考えてよいであろう。つまり、トレルチの神学とドイツの政治的な状況を組み合わせることで、神学を実践的な立場へ広げ繋げる試みである。今後のドイツのトレルチ研究も、グラーフを中心としたこのトレルチ学会が中心となって行うと考えられる。

1-2. 日本

日本のトレルチ研究は、トレルチの死後しばらく経ってから、20 世紀の半ば頃に始まったと考えられる。最古のトレルチに関する研究書は、熊野義孝『トレルチ』(鮎書房, 1944 年)である。この頃は、日本におけるトレルチの著作の翻訳が 2, 3 冊しかない状況で、参考文献はほぼ全てドイツ語である。熊野は植村正久に師事した経験のある牧師であり、バルト主義者でもあったため、日本では数少ないトレルチに関心を持つ神学者であったと考えられる。この書物において熊野は、トレルチの学問的なテーマと傾向を宗教、歴史、倫理の観点から紹介している。全体的にはトレルチに対して肯定的な見方をしており、「信仰と知識、啓示と理性、教義と歴史といふやうな対立を克服すること、而もそれをただ近代プロテスタント神学の課題としただけではなく実に彼自身の魂の問題として採り上げ、両者の統一総合のために苦闘したのである」⁽¹⁸⁾と評価する。しかし、彼が宗教哲学、歴史哲学、文化哲学に取り組み業績を残したにもかかわらず、「これらの主題の下に自身の組織的な哲学体系を形成するに至らなかった」⁽¹⁹⁾と結論する。

戦後しばらく、トレルチ個人に焦点をあてた新しい研究書は見られない。その中でも、大木英夫は『ピューリタニズム倫理思想—近代化とプロテスタント倫理の関係—』(新教出版社, 1966 年)の中でトレルチに言及しているが、まとまった言及は序文のみであり、トレルチの論文「近代社会におけるプロテスタンティズムの意義」におけるピューリタンの項を参照する程度にとどまっている。

唯一、大林浩の『トレルチと現代神学—歴史主義神学とその現代的意義—』(日本基督教団出版局, 1972 年)は、トレルチの思想を包括的に紹介し、トレルチの広大な業績における一貫したテーマを探ろうとした研究書である。大林は関西学院大学を出た後に、日本基督教団の後援でアメリカの神学校とアイビーリーグの大学の博士課程を出ている。アメリカの神学部で学んだ後日本で神学の研究者になる例は、さほど多くない。そのような背景を持つ彼による、ドイツでのトレルチ批判を修正する試みや、トレルチがキリスト教の絶対性を追究したことに着目する姿勢は、現在のトレルチ

研究者たちにも共通する。更に大林は、トレルチの神学を「宗教史的な神学」と定義し、彼が当時の時代精神に細心の注意を払いながらキリスト教と文化科学の折り合いをつけようとした点に注目する。『トレルチと現代神学』は、日本における1980年代までの唯一本格的なトレルチ研究書であると言える。

しかし、1981年のドイツにおけるトレルチ学会創設と同時に、日本でも「日本トレルチ学会」が創設され、更に同年から『トレルチ著作集』（ヨルダン社、1980 - 1986年）の刊行が始まったことで、日本語で入手できる一次資料が増え、研究も進み始めた。当時は本国ドイツのトレルチ学会に所属する研究者との交流も活発であり、2001年に東京神学大学で開催された学術大会には当時のトレルチ学会会長であるグラーフが招かれた。ただし、論文執筆者が関係者に確認したところ、日本トレルチ学会は現在ほとんど活動していない。またトレルチ著作集にも、大きな短所が見出される。著作集は全集ではないため、トレルチを理解するうえで重要な論文である「キリスト教と諸集団における社会教説」「ドイツ精神と西欧」「キリスト教の絶対性と宗教の歴史」などが含まれていないことである。

トレルチ著作集の訳者の1人である近藤勝彦による『トレルチ研究 上・下』（教文館、1996年）は、日本のトレルチ研究を語る上で欠かせない書物である。これはトレルチの思想を、歴史主義から見る神学、信仰的な観点から見る神学、「ヨーロッパ文化総合」思想、そしてウェーバーの影響という4つに分け、各部においてトレルチの主要な論文を年代順に紐解きながら解説していく形式をとっており、トレルチの思想の推移が分かりやすい構成になっている。

また佐藤真一による『トレルチとその時代—ドイツ近代精神とキリスト教—』（創文社、1997年）は、トレルチの教授資格請求論文に始まり、第一次世界大戦期とワイマール共和国期のトレルチの思想と活動について考察する。『トレルチとその時代』は、トレルチの教授時代の論文以外の一次資料（例えば、教授資格請求論文、書簡、新聞記事など）を多く取り上げているという点に特徴がある。更に佐藤は、序文で述べている通り、時代との関連でトレルチを理解することを主軸に置いているため、日本ではこの書物以外に翻訳がない雑誌『キリスト教界』や、福音主義社会会議の議事録といった、当時のプロテスタンティズムの理解において重要な一次資料が多く引用されている。このため、『トレルチとその時代』は、いわば副・一次資料としても評価され活用されることが多い。

トレルチを議論の中心にすえた日本の代表的な二次資料としては、上の2作が主に挙げられるであろう。その他に、近代ドイツの時代状況と思想史の接点の1つとしてトレルチを取り上げる傾向が、近年生まれてきている。例えば、安酸敏眞の『歴史と探究—レッシング、トレルチ、ニーバー—』（聖学院大学研究叢書2、聖学院大学出版会、2001年）は、歴史主義とキリスト教の関係を探るために上の3人を選び出し、各人の歴史主義の思想について考察する。ただし上の3人に直接の深い関わりはなく、あくまで著者の関心に基づいて選別されたものであることも明記されている。また深井智朗は、近代ドイツの政治史とプロテスタント神学史の関係性を探るというテーマを念頭においた資料を多く出版している。その中で特にトレルチに頁を割いているのは、『十九世紀のドイツ・プロテスタンティズム—ヴィルヘルム帝政期における神学の社会的機能についての研究—』（教文館、2009年）である。ここで描かれるトレルチは、ハルナックやマルティン・ラーデ、フリードリヒ・ナウマンといった、同時代に出現した綺羅星のごとき著名なプロテスタント神学者達の1人であり、彼に対するバルトの批判の訂正を中心に、神学と文化科学を統合しようとしたという業績

について述べられている。

最近の日本のトレルチ研究者達に共通した特徴として挙げられるのが、ドイツ留学の際に師事した神学者の傾向を引き継いでいるということである。『トレルチ研究 上・下』の原型である近藤の博士論文の指導教授は、戦後早期からのトレルチ研究者の1人であったユルゲン・モルトマンである。ただし、モルトマンはむしろトレルチ思想の批判側であるが、博士論文の指導教授としての彼に近藤は謝辞を述べている⁽²⁰⁾。深井はグラーフに師事しており、日本で出版されているグラーフの著書はほとんどが深井の翻訳によるものである。また佐藤真一は、前述したように評判の高い最新のトレルチの伝記を出版したドレッシャーに師事している。安酸のみは、アメリカのヴァンダービルト大学に留学し、ニーバーとトレルチの研究で博士号を取得した。

よって、日本のトレルチ研究の傾向は、ドイツで行われている研究に主に大きな影響を受けていることが分かる。しかし、それは個人の神学者の影響であり、日本では日本独特のネットワークの中で研究を進めている印象を受ける。特に大学のネットワークが注目され、東京神学大学、聖学院大学が現在のトレルチ研究の中心となっていると考えられる。深井、安酸、佐藤真一は聖学院大学研究所の元同僚であるし、日本トレルチ学会の本部は東京神学大学に置かれ、前述の研究者達はこの大学の卒業生でもあるからである。

2. マックス・ウェーバーとの比較研究

「はじめに」で述べたように、ウェーバーとトレルチはハイデルベルク大学で極めて親しい関係にあった。そのため、2人の思想には共通点や、互いの研究に影響された部分が複数見受けられる。ウェーバーとの比較研究は、神学の他には、ウェーバーの専門であった社会学の分野からなされることが多い。しかし神学ほど二次資料が多くないので、ドイツと日本をまとめて紹介する。

まず、ドイツの H. E. テートの『ハイデルベルクにおけるウェーバーとトレルチ』（宮田光雄、石原博訳、創文社、1988年）が、トレルチの社会的考察として第一に挙げられる。この著書では、ハイデルベルク時代のウェーバーとトレルチの私的、公的交流の双方が語られている。私的な面では、前提として当時のハイデルベルクがラディカルで自由な議論を許容する、ドイツでも特別な地であったことが述べられる。そしてその地において、前述のように、ウェーバー家のサロンで2人が交流したことが重視される。公的な面では、ウェーバーとトレルチに共通する思想として、テートは特に近代社会と資本主義への危機感を挙げる。両者とも、近代社会が信仰という拠り所を見失い、暗黒の中にあることを意識していた。邦訳されているトレルチ研究者の中でも、テートはトレルチとウェーバーの両者に焦点をあてた点で希少な研究者であるが、結論部分ではトレルチ寄りであり、彼の目指したキリスト教的な人格と自由が、ウェーバーの提唱した「英雄的ニヒリズム」⁽²¹⁾より暗い時代を生き抜くのに役立ち、人間の尊厳を守ったと指摘する。

日本では、社会学者の柳父国近が、『ウェーバーとトレルチ—宗教と支配についての試論—』（みすず書房、1983年）において、2人の関連について考察している。この著書は、別々に掲載された8編の小論文をまとめたものであり、ウェーバー思想をメインに据えて、「西ヨーロッパ近代の『市民社会』とはどのようなものだったのか」⁽²²⁾を探るという一貫したテーマを持つ。このカッコつきの「市民社会」は、ウェーバーやトレルチが扱ったあくまで思想上のものであり、カルヴィニズム

や禁欲主義が大きく影響していたという、特殊な時代性を帯びたもののことである。そして柳父は、このような『『特殊近代市民社会』の構造とそのプラスの遺産』⁽²³⁾「そしてそれらを、ウェーバーやトレルチがどのような『歴史の社会学』の眼で解説していたか」⁽²⁴⁾について論じることがこの著書の目的であると述べる。ここで柳父は、「禁欲」「ルター主義」「歴史主義」といった、ドイツの市民社会形成に大きく影響を及ぼしていると考えられる幾つかのテーゼを抜き出し、それらについてのトレルチとウェーバーの思想を比較するという方法をとる。彼らの問題意識は幾つかのテーゼについて共通しているが、「新しい学問を開拓したのはウェーバーであり、その影響下にトレルチも独自の業績を残した」⁽²⁵⁾というのが柳父の見方である。しかし、ウェーバーが「徹底的な相対主義の立場」⁽²⁶⁾をとり、『『価値自由』と『理念型』の認識論』⁽²⁷⁾に基づいて全てを理論化したのに対し、トレルチはより困難な立場にあった。すなわち彼は、神学者としてキリスト教信仰を絶対的に肯定しながらも、歴史哲学者としてその相対的な新しい価値をも見出さなくてはならなかったのである。その結果、全てを包括する方法論としてトレルチが達したのが、「現在の文化総合」⁽²⁸⁾であったと柳父は結論づけている。

また宗教学者の金井新二は、『ウェーバーの宗教理論』(東京大学出版会、1991年)の中で、トレルチがウェーバーに与えた影響について考察するが、参考資料には前に掲げたテートの著作が挙げられている。金井は始めに、ウェーバーの宗教観とプロテスタント信仰が、敬虔な母親の影響と宗教史学派との交流、福音社会会議への所属から培われたと指摘し、彼の主要著書『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に対してその宗教観からの再分析を試みる。トレルチはプロテスタンティズムに対し「歴史社会的説明」⁽²⁹⁾を試み、宗教改革を「経済生活(資本主義)を含めて、教会制度や啓蒙主義文化一般によって媒介された長期的プロセス」⁽³⁰⁾であると定義した。これに対し、ウェーバーはその歴史的展開でなく心理学的な側面に注目し、「彼岸の救済の追求から、その救済の現世における確証の追求へと人々の関心が変化したこと」⁽³¹⁾にその意義を見出す。結局ウェーバーは、「福音」と「社会」それぞれに重要性を認めつつ、その分離を強固に主張したのである。これは、トレルチとウェーバーを対比する時の典型的な見方であると言える。

以上の3冊を見ると、トレルチとウェーバーの比較研究はさほど多くないが、それでも決まった傾向があることが見て取れる。多く試みられるのが、ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』とトレルチの『キリスト教会と諸集団の社会教説』を何らかの形で比較するという方法である。また、1904年のアメリカ旅行と講演会の経験が2人に与えた影響も重視されている。

神学の分野でも、近藤の『トレルチ研究 下』第4部第1章のように、トレルチとウェーバーの関係について触れることはある。そこでは、ウェーバーのニヒリズムや合理化、悲劇的英雄主義と対比させたトレルチの共同体形成や調和が語られる。しかし社会学の視点を取り入れながら、他の分野からトレルチとウェーバーが語られるとき、金井が主張するように、プロテスタンティズムの倫理、特にカルヴィニズムやピューリタンについてのウェーバーの思想にトレルチが与えた影響という視点がしばしば掘り下げて考えられる。そして、ウェーバーによる、社会におけるキリスト教の役割と政治の役割を分離した考え方が、ハイデルベルクでの交流を通じてトレルチにも影響を与えたとするのが現在の主な見方である。

トレルチとウェーバーは、神学と社会学という権威ある研究分野の巨匠である。故に、その相互

影響について論じることは重要な作業であり多くの可能性を秘めている。しかし、以上の3冊を見ると分かるのは、現代的な意義をもって考えるならむしろ、近代ドイツという揺れの多い時代における危機と課題を2人が同時に見出していたこと、それぞれの分野から解決法を必死に模索したことがむしろ焦点をあてられるべきではないだろうか。そして現代に即してあえて続けるなら、今後その共通した問題意識がどう活かされ実践されるかという点にも見るべきものがあるように思える。

3. その他の研究

最後に、歴史哲学方面からのトレルチ研究について考察する。これは現時点で最も資料が少ない分野である。その理由は、トレルチが本格的に歴史哲学の研究を始めたのが晩年であり、彼自身の思想が未発達のみであったことが挙げられるであろう。

ドイツでは、エックハルト・レッシングが『トレルチの思想—その歴史哲学をめぐる—』(佐伯守訳, 日本YMCA出版局, 1976年)において、トレルチの歴史哲学を第一期から第三期に分け、形而上学的、心理学的、そして歴史主義的な推移を考察している。原著の出版は1965年であり、早期のトレルチ研究書であると言える。序文においてレッシングは、トレルチの歴史哲学が師であるアルブレヒト・リッチェルへの批判から生まれたものであるとし、リッチェルの「信仰的・価値的判断を媒介にして、そのほかの歴史から離脱させられたイエスの人格性」⁽³²⁾を重視する、抽象的で非科学的なキリスト教理解を乗り越えるべく、トレルチは「発展概念にもとづいて企図されたあらゆる歴史哲学」⁽³³⁾によってキリスト教の本質を探究し、宗教という概念について「超越性への人間的現存在のかかわりと、ならびに、そのかかわりの歴史的発展過程における一貫した同等性が、この概念によって同時に主張されているのである」⁽³⁴⁾とする。レッシングは結論部分で、トレルチの歴史哲学は歴史の「個性」と「発展概念」をその論の核としたことが大きな特徴であると述べる。しかしながら彼は、トレルチの歴史哲学の不完全性が「古プロテスタント教義学との結合を遂行することはできなかった」⁽³⁵⁾ことにあるとも述べている。

また竹本秀彦は、『エルンスト・トレルチと歴史的世界』(行路社, 1989年)において、トレルチの歴史哲学を様々な視点から考察する。彼の論点は、トレルチが「神学の歴史化を促進」⁽³⁶⁾する試みをしたということであり、その成果は以下の2点に結実すると述べる。すなわち、キリスト教の絶対性を超越的なものから、ヨーロッパ世界に内在する文化的なものへと変質させたこと、また歴史の「発展概念」を発見したことである。日本でトレルチ研究を行う学者はそのほとんどが神学者であるが、竹本は歴史学者でありながらトレルチの研究書を出した珍しい例である。

最後に、アメリカの宗教学でのトレルチに対する新たな位置づけが読み取れる資料として、増澤知子の『世界宗教の発明—ヨーロッパ普遍主義と多元主義の言説—』(秋山淑子, 中村圭志訳, みすず書房, 2015年)を挙げておきたい。「世界宗教」とは現代においてしばしば聞かれる言葉であり、この概念を取り扱った科目は現代のアメリカの学校において人気科目の一つであるが、その意義や歴史は未だ不明瞭なままである。増澤は、「宗教および諸宗教に関する近代の言説は、当初よりつまり皮肉な意味も込めて、生来的に一世俗化の言説であり、かつまた明らかに他者化の言説である」⁽³⁷⁾というテーゼを立て、本書において「ある一個の言説的習慣、すなわちカテゴリーとしての『世界宗教』の系譜を描くこと」⁽³⁸⁾を目的としている。

ヨーロッパの宗教史においては何千年もの間、キリスト教が権威を握り続けてきたが、19世紀以降は啓蒙主義と大航海時代の影響で、より多様な宗教の有り方を肯定するのが主流となってきた。この大きな転換期に、世界宗教言説が成熟期に入った一つのターニングポイントとして、トレルチが取り上げられている。ここでのトレルチの世界宗教観を語る題材は、「世界宗教においてキリスト教の占める位置」⁽³⁹⁾という最晩年に書かれた未発表の講演原稿である。トレルチのテーマは、名実ともに急速にグローバル化する世界において、ヨーロッパは主権を握り続けることができるのか、またその中で、キリスト教が普遍性をいかに保つことができるのかという疑問である。しかしここでトレルチは、「問題のすり替え」⁽⁴⁰⁾を行い、キリスト教の普遍性の問題を宗教一般の普遍性の維持の問題に置き換えて、明確な答と当面の危機を回避する。そして彼は、有効な方法論として、「たとえ歴史的知識が信仰の危機をもたらした当のものであるとしても、『特異な一領域』たる宗教の実在性についての新たな知識をもたらすことができるのもまた、歴史学—とくに新学問である比較宗教史学—なのである」⁽⁴¹⁾と考える。このようなトレルチの、歴史学と神学を混同した方法論と、彼に代表される当時の「世界宗教」言説の確立は、結果として、キリスト教至上主義を多元性至上主義に移行させただけだったのではないかと増澤は指摘している。宗教学者である増澤のトレルチ論は、宗教学史という大きな流れの中に神学者かつ歴史哲学者であるトレルチをどう位置づけるかという新しい課題を提示している。

トレルチを歴史哲学やその他の側面から研究する二次資料は、ドイツ語、日本語を合わせても、本論文で提示した3つの傾向の中で最も少なく、これから一層の開拓が待たれる分野であると言える。これまでの研究が共通して着目しているのは、「キリスト教の普遍性、絶対性を、変革する歴史の中にどう位置づけるか」という問いにトレルチが最後まで答えようとしたこと、晩年の著書『歴史主義とその諸問題』に出てくる「発展」概念がその答なのではないかということである。その上で、神学、社会学以外の分野におけるトレルチ研究の課題は2つあると考えられる。第一に、未完のまま終わった晩年の歴史主義についてのトレルチ自身の思想を更に詳しく解明することが今後も求められるであろう。そして第二に、増澤が試みているように、宗教学史という大きな歴史の流れの枠組みの中に、トレルチの功績をどう位置づけるかということである。

4. まとめ

本論文では現代のトレルチ研究を、大きな3つの流れに分けて俯瞰した。神学の分野では、トレルチの再評価がますます盛んになり、ドイツにおいても日本においても、その著作の編纂や見直しが一層進むことが大いに期待される。ウェーバーとの比較研究については、これまでの研究動向が大きく変わることはおそくないであろうが、2章の最後の部分で述べたように、時代状況と重ね合わせることで更に考察が進む可能性がある。またその他の分野においては、トレルチ自身の思想の整理と、全体史の中にそれをどう位置づけるかという2つの課題があるということを指摘した。1人の神学者の思想が、これほど多分野で取り上げられているという事例は他に少ないのではないだろうか。多方面でのトレルチ思想の研究が進み、それらが重ね合わされることによって、第二次世界大戦前夜という特殊な状況下のドイツにおけるプロテスタンティズムの内容がいよいよ明らかになってくることが望まれる。

註

- (1) 文化プロテスタンティズムとは、19世紀の統一ドイツ帝国において増加したブルジョワに受容されやすいプロテスタント概念を作り出そうとした運動を指す。グラーフ（深井智朗，安酸敏眞編訳）『トレルチとドイツ文化プロテスタンティズム』聖学院大学出版会，2001年，第1章と第2章に詳しい。
- (2) 近藤勝彦『トレルチ研究 下』教文館，1996年，151頁。
- (3) 安酸敏眞『歴史と探究—レッシング，トレルチ，ニーバー—』聖学院大学出版会，2001年，第3章。
- (4) トレルチに対するハルナックやトーマス・マンの弔辞からそれは読み取れる。F. W. グラーフ（近藤正臣，深井智朗訳）『ハルナックとトレルチ』聖学院大学出版会，2007年，第5講。
- (5) 同書，81 - 98頁。
- (6) W. グロール（西谷幸介訳）『トレルチとバルト—対立における連続—』教文館，1991年，12頁。
- (8) 論文「十九世紀の福音主義神学」に，この時の彼の心境が詳しく述べられている（井上良雄，小川圭治，吉永正義訳『カール・バルト著作集 4』新教出版社，1999年，251 - 276頁）。
- (9) 吉村善夫訳『カール・バルト著作集 14』新教出版社，1970年に収録されている。
- (10) 佐藤真一『トレルチとその時代』創文社，1997年，4頁。
- (11) ただし，戦後の比較的早期のドイツで書かれたものであり，弁証法神学の影響が色濃い。
- (12) 佐藤前掲書，5頁。
- (13) 同書同頁。
- (14) リチャード・ニーバー（赤城泰訳）『キリストと文化』日本基督教団出版局，1967年，5頁。
- (15) 柳父国近『ウェーバーとトレルチ—宗教に関する試論—』みすず書房，1983年，98 - 120頁。
- (16) 邦訳はまだない。
- (17) F. W. グラーフ（深井智朗，安酸敏眞編訳）『トレルチとドイツ文化プロテスタンティズム』聖学院大学出版会，2001年，3頁。
- (18) 熊野義孝『トレルチ』，鮎書房，1944年，25頁。
- (19) 同書，76頁。
- (20) 近藤勝彦『トレルチ研究 下』教文館，1997年，9頁。
- (21) H. E. テート（宮田光雄，石原博訳）『ハイデルベルクにおけるウェーバーとトレルチ』創文社，1988年，108頁。
- (22) 柳父前掲書，3頁。
- (23) 同書，6頁。
- (24) 同書同頁。
- (25) 同書，55頁。
- (26) 同書，240頁。
- (27) 同書同頁。
- (28) 同書，244頁。

- (29) 金井新二『ウェーバーの宗教理論』東京大学出版会，1991年，13頁。
- (30) 同書，13頁。
- (31) 同書，131頁。
- (32) エックハルト・レッシング（佐伯守訳）『トレルチの思想—その歴史哲学をめぐって—』日本YMCA同盟出版部，1976年，6頁。
- (33) 同書，7頁。
- (34) 同書，101頁。
- (35) 同書，11 - 12頁。
- (36) 竹本秀彦『エルンスト・トレルチと歴史的世界』行路社，1989年，43頁。
- (37) 増澤知子『世界宗教の発明—ヨーロッパ普遍主義と多元主義の言説—』秋山淑子，中村圭志訳，みすず書房，2015年，41頁。
- (38) 同書，42頁。
- (39) 邦訳は，深井智朗訳「世界宗教におけるキリスト教の位置」（『春秋』579号，2016年6月 - 582号，2016年10月）。
- (40) 増澤前掲書，427頁。
- (41) 同書同頁。

参考文献

- 大木英夫『ピューリタニズム倫理思想—近代化とプロテスタント倫理の関係』新教出版社，1966年
- 大林浩『トレルチと現代神学—歴史主義神学とその現代的意義—』日本基督教団出版局，1972年
- 近藤勝彦『トレルチ研究 上・下』教文館，1996年
- 佐藤真一『トレルチとその時代』創文社，1997年
- 竹本秀彦『エルンスト・トレルチと歴史的世界』行路社，1989年
- 増澤知子（秋山淑子，中村圭志訳）『世界宗教の発明—ヨーロッパ普遍主義と多元主義の言説—』みすず書房，2015年
- 深井智朗『19世紀のドイツ・プロテスタンティズム—神学の社会的機能についての研究』教文館，2009年
- 安酸敏眞『歴史と探究—レッシング，トレルチ，ニーバー—』聖学院大学出版会，2001年
- 柳父国近『ウェーバーとトレルチ—宗教に関する試論—』みすず書房，1983年
- F. W. グラフ（深井智朗，安酸敏眞編訳）『トレルチとドイツ文化プロテスタンティズム』聖学院大学出版会，2001年
- F. W. グラフ（近藤正臣，深井智朗訳）『ハルナックとトレルチ』聖学院大学出版会，2007年
- W. グロール（西谷幸介訳）『トレルチとバルト—対立における連続—』教文館，1991年
- H. E. テート（宮田光雄，石原博訳）『ハイデルベルクにおけるウェーバーとトレルチ』創文社，1988年
- リチャード・ニーバー（赤城泰訳）『キリストと文化』日本基督教団出版局，1967年
- カール・バルト「十九世紀の福音主義神学」（井上良雄，小川圭治，吉永正義訳『カール・バルト著作集 4』新教出版社，1999年），251 - 276頁

カール・バルト（吉村善夫訳）『ローマ書講解』（『カール・バルト著作集 14』）新教出版社，1970年

エックハルト・レッシング（佐伯守訳）『トレルチの思想—その歴史哲学をめぐって—』日本 YMCA 同盟出版部，1976 年

Walter Bodenstein, Neige des Historismus. Ernst Troeltschs Entwicklungsgang, Gütersloh, G. Mohn, 1959

Hans Bosse, Marx, Weber, Troeltsch: Religionssoziologie und marxistische Ideologiekritik, München, Kaiser, 1971

Hans-Georg Drescher, Ernst Troeltsch. Leben und Werk, Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 1991

Gustav Schmidt, Deutscher Historismus und der Übergang zur parlamentarischen Demokratie: Untersuchungen zu den politischen Gedanken von Meinecke, Troeltsch, Max Weber, Lübeck, Matthiesen Verlag, 1964

Ernst Troeltsch, Kritische Gesamtausgabe, ed. by Friedrich Wilherm Graf et al., Berlin, Walter de Gruyter, 1998-2014

現在入手可能なトレルチの邦訳一覧

森田雄三郎他訳『トレルチ著作集 全 10 巻』ヨルダン社，1980 - 1986 年

荒木康彦訳『私の著書』創元社，1982 年

内田芳明訳『ルネサンスと宗教改革』岩波文庫，1959 年

大坪重明訳『歴史主義とその克服 第 2 版』理想社，1968 年

高野晃兆，帆苅猛訳『古代キリスト教の社会教説』教文館，1999 年

中村正雄訳『近代精神の本質』創元社従業員組合，1954 年

西村貞二訳『ヨーロッパ精神の構造—ドイツ精神と西欧—』みすず書房，1952 年

同『アウグスティヌス—キリスト教的古代と中世—』新教出版社，1965 年

深井智朗訳『キリスト教の絶対性と宗教の歴史』春秋社，2015 年

同『近代世界の成立にとってのプロテスタンティズムの意義』近代出版社，2015 年

同「世界宗教におけるキリスト教の位置」（『春秋』579 号，2016 年 6 月 - 582 号，2016 年 10 月）

安酸敏眞訳『信仰論』教文館，1997 年